

築館町文化財調査報告書第10集

伊治城跡

－平成8年度：第23次発掘調査報告書－



平成9年3月

宮城県 築館町教育委員会

伊治城跡

—平成8年度：第23次発掘調査報告書—

平成9年3月

築館町教育委員会



伊治城跡全景

中央の集落のある台地全体が遺跡範囲

【この空中写真(昭和51年撮影)は、建設省国土地理院長
の承認を得て、同院撮影の写真を掲載したものです】
〔承認番号 平9東復第232号〕

はじめに

今年度は、伊治城跡の発掘調査が昭和52年から多賀城跡調査研究所により開始されてから、ちょうど20年目にあたり、また、築館町教育委員会が主体となり宮城県教育庁文化財課の協力を得て発掘調査を開始してから、10年の一つの節目をむかえた年にあたります。

「幻の城柵」と呼ばれていた伊治城跡の有力な擬定地であった城生野地区が、発掘調査の結果により、ついに伊治城跡と確定することにいたりました。その間、数多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことや発掘調査地を提供していただいた、土地所有者の方々に深く感謝申し上げます。

今年度の調査は、より正確な伊治城の範囲をつかむため、西辺の外郭区画施設の検出を目的に行いました。調査の結果、昨年検出された外郭区画施設の一部とみられる遺構に類似した遺構が検出されました。伊治城跡の西辺の外郭区画施設とは断定するにはいたりませんでしたが、今後も調査を継続していく、伊治城跡の正確な全体像を解明していきたいと考えております。

最後になりましたが、調査を担当していただきました宮城県教育庁文化財保護課の皆さん、特に直接担当されました、三好秀樹技術、藤村博之技師に深く感謝を申し上げます。また、発掘調査をするにあたり、協力していただきました、土地所有者の方々に心から感謝申し上げます。

平成9年3月

築館町教育委員会

教育長 南 條 正 臣

例　　言

1. 本書は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する伊治城跡の平成8年度発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本書には、国庫補助事業計画にもとづく第23次調査の結果を収録した。
3. 本書の作成は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、課員の検討を経て藤村博之が整理・執筆・編集をおこなった。
4. 本書における上色についての記述は「新版標準上色帖」に基づいている。
5. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000の地形図「金成」「築館」を複製して使用した。
6. 調査時における地区割り（グリッド）は、城生野公民館前の伊治城跡「原点1」を基準点（0.0）とし、この点と「原点2」とを結ぶ線を基準にした直角座標を組んで割り出した。基準線の南北軸はN-2°8'8"-Wで、基準点の座標値は以下のとおりである。

原点1 X = -137,175.996 Y = 18,059.271

原点2 X = -137,172.798 Y = 18,145.712

なお、図中のW-420、N-120などの表記は原点1から西に420m、北に120mであることを表す。

7. 図中にある方位は、座標北を表している。
8. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品は、築館町教育委員会が一括して保管している。
9. これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書については、付表1にまとめて示してある。

調査要項

1. 遺跡名：伊治城跡（宮城県遺跡登録番号：41007）
2. 所在地：宮城県栗原郡築館町字城生野
3. 調査主体：築館町教育委員会
4. 調査面積：約450m²
5. 調査期間：1996年10月7日～11月7日
6. 調査担当：宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会
7. 調査員：宮城県文化財保護課 三好 秀樹 藤村 博之
築館町教育委員会 千葉 長彦
8. 調査協力：佐藤 萬、白鳥 やゑ、菅原 定雄、鈴木 三郎、鈴木よしみ、
高橋 佐一、千葉 重良、千葉ち江子、千葉 次男、辻市 英男（敬称略）

目次

はじめに

例　言

調査要項・目　次

| | |
|-----------------------|----|
| I. 遺跡の概要 | 1 |
| II. 遺跡の位置と周辺の遺跡 | 1 |
| III. 第23次調査 | 3 |
| ① 調査の目的..... | 3 |
| ② 調査の方法と経過..... | 3 |
| ③ 発見された遺構と遺物..... | 5 |
| IV. 考　察..... | 12 |
| 引用・参考文献..... | 14 |

付表1. 「伊治城」発掘調査および報告書一覧

2. 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

報告書抄録

写真図版

I. 遺跡の概要

伊治城は、律令政府が陸奥国経営の一環として栗原郡を中心とした宮城県北部に神護景雲元年(767)に設置した城柵である。続日本紀や日本後紀には、延暦15年(796)までの伊治城に關わる記事があり、当時の具体的な状況を知ることができる。なかでも、この地域(上治郡)の大領であった伊治公皆麻呂が宝亀11年(780)に按察使紀広純と牡鹿郡大領道嶋大橋を伊治城で殺害し、さらに多賀城を攻撃し、放火するという事件「伊治公皆麻呂の乱」は当時の政府に大きな衝撃を与えたものであった。

伊治城は宮城県内における城柵の中で、桃生城とならび創建年代が文献に残されている数少ない城柵であり、その所在地については多くの検討がなされいくつかの候補地があげられていた。しかし、有力な擬定地である城生野地区の発掘調査が多賀城跡調査研究所により昭和52年度から3年間、その後昭和62年度からは築館町教育委員会・宮城県教育委員会によって毎年継続的に行われ、本遺跡が伊治城であることは確実となった(付表1参照)。これまでの調査によって、伊治城は東西約700m、南北約900mほどの広がりをもち、その南東部に東西54~58m、南北61mの築地塀で囲まれた政庁が位置し、その政庁をさらに取り囲むように東西約185m、南北約240mの範囲に内郭(官衙域)が広がり、その外側には主に堅穴住居が配備されているという構成であることが明らかになってきた。また、政庁の建物群には3時期の変遷のあることや大規模な火災があったことなども確認されている(築館町教育委員会:1993)。

平成7年度(第22次調査)からは、不明確である伊治城の範囲を明らかにするために外郭線の調査を行っており、伊治城南西地域の台地と丘陵が接続する場所で上幅5mほどの大溝跡とその北東側からそれと平行する上幅4~5mの上取り痕とみられる溝状遺構などが確認されている(築館町教育委員会:1995)。

II. 遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡は宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は多賀城の北約52kmに位置し、多賀城と胆沢城を結ぶほぼ中間地点にあたる。

宮城県北部の地形を概観すると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山脈が南北に大きく横たわっている。この奥羽山脈は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの小丘陵に分かれている。本遺跡はその最も北に位置する築館丘陵東端部と接する標高20~25mほどの平坦な河岸段丘上に立地している。この段丘は南西部で背後の丘陵と接続しているが、南から東を一迫川、北を二迫川、西を小さな谷によって画され、北に張り出すほぼ方形状の独立した地形をなしている。段丘の東、北、西には比高差約6mの段丘崖がみられ、その前面には広い沖積地が続いている。遺跡の範囲はこの台地のほぼ全域にわたり、その範囲は東西約700m、南北約900mと推定されている。



| No. | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | No. | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | No. | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 |
|-----|--------|----|------|----------|-----|--------|------|-----|-------------|-----|--------|------|-----|----------|
| 1 | 伊治城跡 | 段丘 | 城壁跡 | 古墳、奈良・平安 | 10 | 刈穂袋遺跡 | 自然隕石 | 包含地 | 縄文、古代 | 19 | 山ノ神遺跡 | 段丘 | 集落跡 | 縄文、古代 |
| 2 | 小道御室跡 | 丘陵 | 窓跡 | 古代 | 11 | 刈穂館遺跡 | 自然隕石 | 包含地 | 縄文 | 20 | 西館遺跡 | 丘陵 | 空地 | 縄文、中世 |
| 3 | 栗原寺跡 | 丘陵 | 寺院跡 | 古代 | 12 | 櫛形豪根遺跡 | 丘陵 | 包含地 | 縄文、古代 | 21 | 篠館城跡 | 丘陵 | 城跡 | 中世、近世 |
| 4 | 尾松遺跡 | 丘陵 | 五角形面 | 古代 | 13 | 宮野前跡 | 丘陵 | 城跡 | 中世 | 22 | 重利山北遺跡 | 丘陵斜面 | 包含地 | 古墳 |
| 5 | 大沢穴古墳群 | 丘陵 | 古墳群 | 古墳、古代 | 14 | 大沢古墳群 | 丘陵斜面 | 円墳 | 古墳 | 23 | 高田山遺跡 | 丘陵 | 包含地 | 縄文、古代 |
| 6 | 長者原遺跡 | 丘陵 | 集落跡 | 古墳、古代 | 15 | 鶴ノ丸遺跡 | 段丘 | 城跡 | 縄文～近世 | 24 | 木戸遺跡 | 丘陵 | 集落跡 | 縄文、古代 |
| 7 | 羽庭穴古墳群 | 丘陵 | 古墳群 | 古墳 | 16 | 宇南遺跡 | 段丘 | 城跡 | 縄文～近世 | 25 | 守山城跡 | 丘陵 | 集落跡 | 縄文、奈良・平安 |
| 8 | 佐野遺跡 | 丘陵 | 集落跡 | 奈良・古代 | 17 | 御物堂遺跡 | 段丘 | 全周跡 | 縄文～近世 | 26 | 船岡遺跡 | 丘陵斜面 | 包含地 | 縄文、古墳、古代 |
| 9 | 慈輝遺跡 | 丘陵 | 集落跡 | 奈良・平安 | 18 | 大門遺跡 | 丘陵 | 集落跡 | 縄文、奈良・平安、中世 | 27 | 高倉貝塚 | 丘陵 | 貝塚 | 縄文、弥生 |

第1図 周辺の遺跡

台地上は現在、宅地が立ち並んでおり、宅地を除く平坦部分はおもに水田や畠地として利用され、段丘崖などの斜面部分は杉林や荒地として原地形が残されている。台地の北端部では調査によって外郭北辺の区画施設であることが確認された空堀状の大溝と、その北に接して走る土堤状の高まりを現在でも東西150mほどにわたって確認することができる(多賀城跡調査研究所:1978)。

本遺跡の周辺には、縄文時代から中・近世に至るまでの遺跡が数多く分布している。特に奈良・平安時代の遺跡が多く、一迫川や二迫川沿いの河岸段丘や低い丘陵上には、佐野遺跡、長者原遺跡、糠塚遺跡、御駒堂遺跡、大門遺跡などの集落遺跡がある。なかでも、御駒堂遺跡では、8世紀初頭に関東地方からの人間の移住が想定されるような土器や遺構が検出されており(小井川・小川:1982)、神護景雲3年(769)に栗原郡が建郡される以前のこの地域の動向を知る上で、きわめて注目される。また、糠塚遺跡では奈良・平安時代の住居跡が30軒検出されており、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式の基準資料になるものである(小井川・手塚:1978)。

なお、本遺跡の東約4kmには、ヘラ切り無調整の坯を土体に焼成した志波姫町狐塚窯跡が、さらに北方約6kmには須恵器や瓦を焼成した金成町小追觀音窯跡があり、この製品は本遺跡にも供給されていた可能性があるとみられている。

III. 第23次調査

① 調査の目的

これまでの調査によって伊治城の政庁の構造や変遷、その周辺域の構成も徐々に明らかになってきており、22次調査からは、こうした成果を受けて外郭区画施設の確認に目的を置いている。

伊治城の外郭線として明確に確認されているのは、昭和52年度に多賀城跡調査研究所によって東西にのびる長さ150mほどの人溝跡とその北に接して走る土壙が確認された北辺の一部のみである(多賀城跡調査研究所:1978)。しかし、北辺の延長上にあたるこの西側では2条の大溝跡が、また台地東端部でも南北に走る2条の大溝跡が検出され(築館町教育委員会:1990・1991)、さらに台地の南西部と背後の丘陵が接続する場所で、大溝跡1条と土取り痕とみられる溝状造構2条が確認されている(築館町教育委員会:1995)。各地点では土壙などが発見されていないものの、遺構についてはその規模や位置関係などから、外郭区画施設の一部である可能性が強いと考えられ、外郭北辺・東辺・南辺になると推定されている。

しかし、外郭西辺については地形から推定されているのみで、実際に調査された地点はない。そこで、第23次調査では、西辺の位置を確定するとともに外郭区画施設の構造を捉えることを目的とし、外郭線が通る可能性が高いとみられる台地西側端部に調査区を設定し調査を行うことにした。

② 調査の方法と経過

第23次調査は10月7日 rozpoczęła się. 調査地点は昭和53年に電気探査によって台地末端から約30mの



第2図 調査区と周辺の地形

地点で溝状の落ち込みが確認されたところにあたる。今回の調査では外郭線の確認と区画施設の構造を捉えるという目的のため、台地の端部から東側(行政側)へできるだけ長い調査区の設定を予定していた。しかし、この地点は現在、地境の不明瞭な畠地や草地となっており、地境を越えて調査区を設定すると現状への復旧が困難とみられたため、地割りごとに小規模な調査区を設けていくことにした。

はじめにA区の場所を調査区として選定し、台地端部側から表上除去を開始したところ、調査区西側で南北に走る上幅約3mの人溝跡(S D451)を検出した。そこで、S D451大溝跡の延びを確認するためにA区の南側にB区、C区を設定した。B・C区でも溝は検出され、A区からC区にかけて約35mほど直線的に延びることが分かった。その後、A区の東側にD区を設定し、調査区の西端と東端で溝状遺構2条(S X452・453)、中央部で柱穴などを検出した。S X452・453はS D451大溝跡と平行して延びていると推測されたため、E区を設定し確認することにした。E区ではS X452の延びを確認している。最後に、一番東側にF区を設定し堅穴住居(S T454)、土壙、柱穴などを検出した。

造構確認作業がほぼ終了した段階で一部掘り下げおよび精査を行い、それと並行して伊治城原点1を基準にしたグリッドポイントを設定し、平面図・断面図の作成を行った。また併せて35mmカラーリバーサルと6×7白黒による写真記録を行い、11月1日にはほぼ調査を終了した。その後、11月7日に空中写真撮影と補足的な調査を行い、全ての調査を終了した。

なお、11月2日には雨天であったが、築館町出土遺物管理センターにおいて一般の人々を対象にした現地説明会を行い、40人ほどの参加を得た。

③ 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構には、区画施設に関わるとみられる大溝跡1条やこれと平行する溝状遺構2条、その他に堅穴住居跡3軒、柱穴、土壙などがある。また、遺物は少ないものの各遺構の堆積土から、土師器、須恵器、かわらけ、鉄製品、鉄滓などが、また表土や造構確認面からは、瓦片、弥生土器(第9図4・5)、石器なども出土している。

【大溝跡】

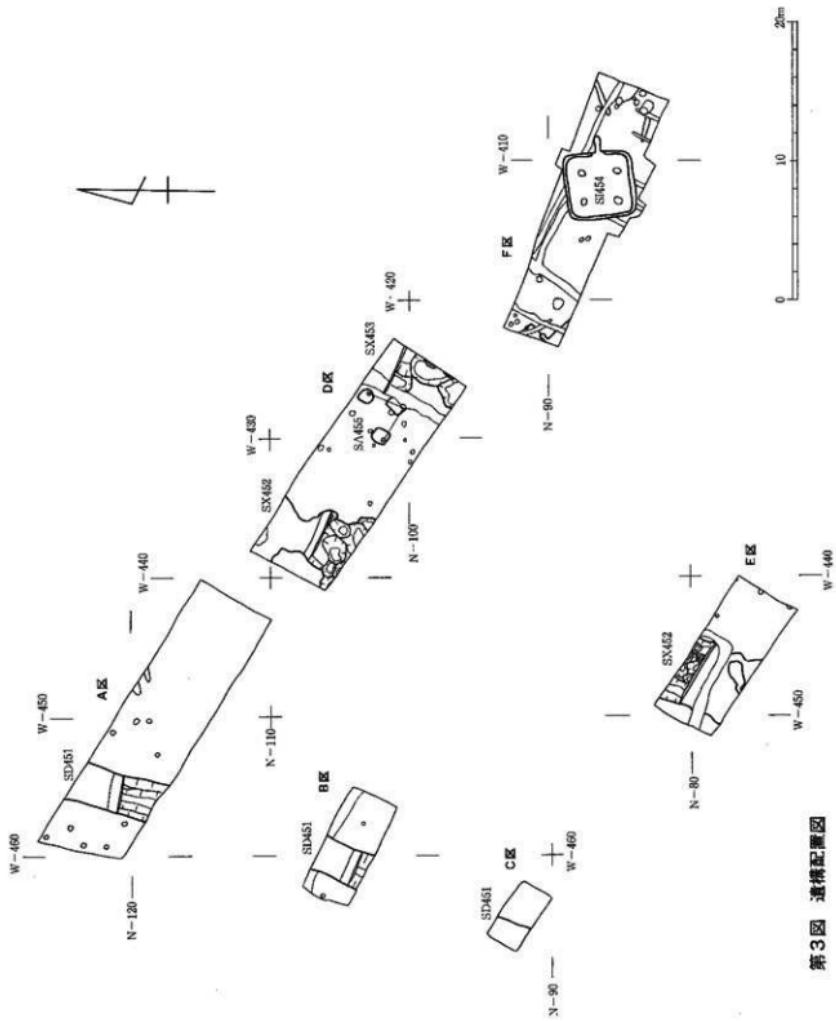
【S D451】(第4図)

A～C区にかけ南北方向に延びる溝跡を約35mほど確認した。溝は台地の西端近くの緩やかな南西斜面を直線的に延びる。確認面は地山面で、上幅は2.6～3.0m、深さは約1.3mである。断面形は途中から開き気味に立ち上がるV字形を呈する。堆積土は11層認められ、いずれも自然流入上であり、7層には灰白色火山灰が堆積している。遺物は堆積土の2層からかわらけ(第9図2)が1点出土したのみである。

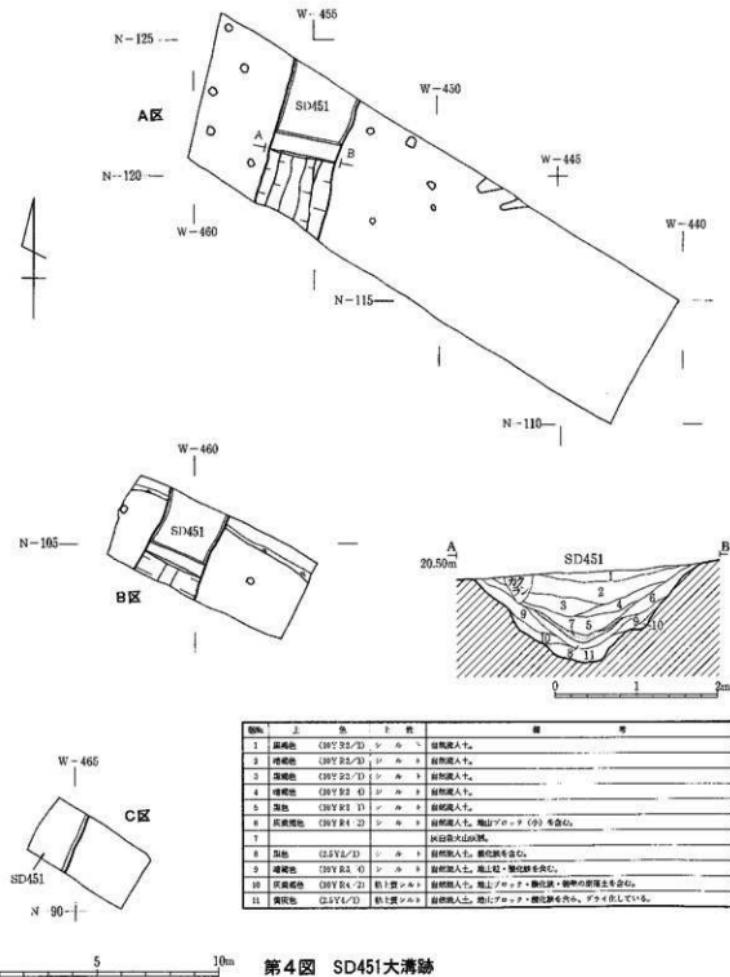
【溝状遺構】

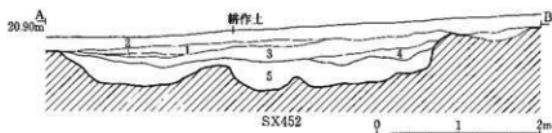
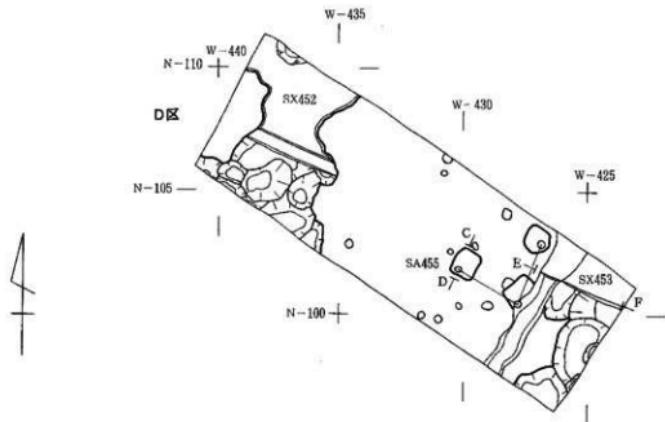
【S X452】(第5図)

D～E区にかけ緩やかな南西斜面を南北方向に延び、S D451大溝跡と平行する。確認長は約36m

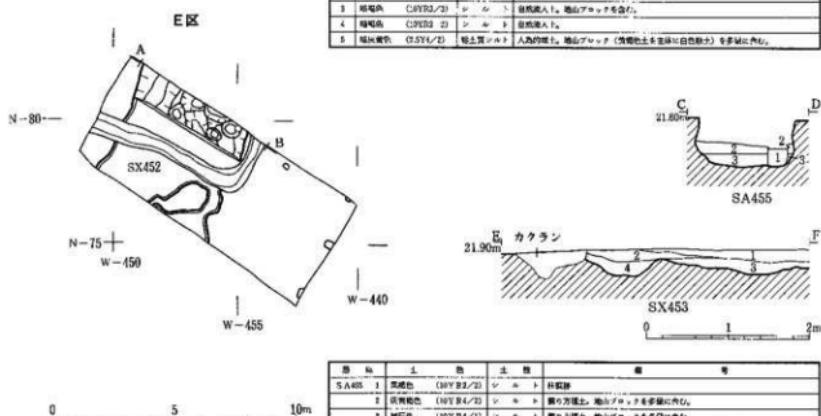


で、SD451大溝跡までは西へ17~20mほどである。確認面は地山面で、両辺は直線的ではなく曲がりくねっており、上幅は2.6~6.1mとなる。深さは20~60cmで、底面には不整形の窪みが多く認められる。堆積土は5層認められる。1~4層は自然流入土で、2層堆積土中には灰白色火山灰のブロックを含む。5層は人為的な埋土と考えられる黒褐色や暗灰黄色のシルトが主体で、地山ブロックを多量に含み、埋め戻されたような状況を呈する。遺物は5層から土師器鉢(第6図2)、須恵器片、剥片、1~4層から上師器壺(第6図1)、須恵器片などが出土している。





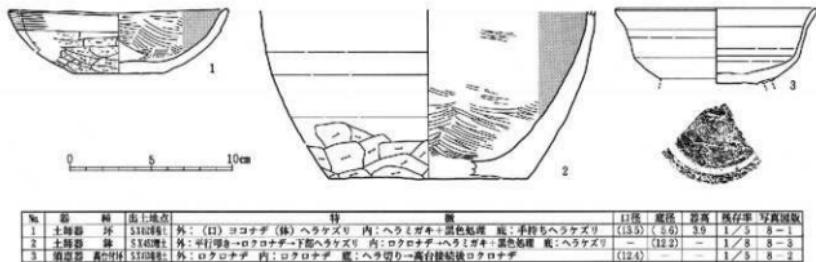
| 番号 | 土 型 | 土 性 | 場 所 |
|----|-----|-------------|--|
| 1 | 黒褐色 | LH192.2/D | ○ ト 林地流入。 |
| 2 | 黒褐色 | C1910.2/D | ○ ト 林地流入。地山火成のゾックを含む。 |
| 3 | 暗褐色 | C1910.2/D | ○ ト 林地流入。地山ゾックを含む。 |
| 4 | 暗褐色 | C1910.2/D | ○ ト 林地流入。 |
| 5 | 暗褐色 | 0.57YR2.2/D | 地山質 ハル。人为的営々。地山ブロック(黒褐色土主張に白色歯)を多量に含む。 |



第5図 SX452・453、SA455

【S X453】(第5図)

D区東端の緩やかな南西斜面で一部検出され、S X452と同様の特徴をもつ。南北方向へ延びるところから、S D451大溝跡・S X452と平行するものと考えられる。確認長は約6mで、S X452までは西へ9~10mほどである。確認面は地山面で、西辺はS X452同様曲がりくねっている。上幅は3.0m以上、深さは25~30cmで、底面には不整形な窪みが多数認められる。堆積土は4層認められる。1層は灰白色火山灰のブロックを含む黒褐色のシルトで、自然流入土とみられる。2~4層は人為的な埋土と考えられる灰黄褐色のシルトで、地山ブロックを多量に含み、埋め戻されたような状況を呈する。遺物は2~4層から少數ではあるが須恵器片、土師器片、1層から須恵器高台付坏(第6図3)などが出土している。



第6図 SX452・453溝状構造出土遺物

【整穴住居跡】

【S I 454】(第7図)

【位置・確認面】F区中央東側の緩やかな南西斜面で検出された。確認面は地山面である。

【平面形・規模】東西4.7m×南北5.0mの方形を呈する。

【堆積土】5層認められる。1~2層は自然流入土である。3~4層は煙道内の堆積土で、3層は白色粘土と地山ブロックや焼土ブロックを多量に含み、カマドが使用されなくなった段階で埋め戻された可能性がある。4層は炭化物と焼土ブロックを互層状に含むことから、カマド機能時の堆積と考えられる。5層はカマド機能時に堆積したとみられる焼土層である。

【壁】地山を壁にしており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は床面から10~28cmである。

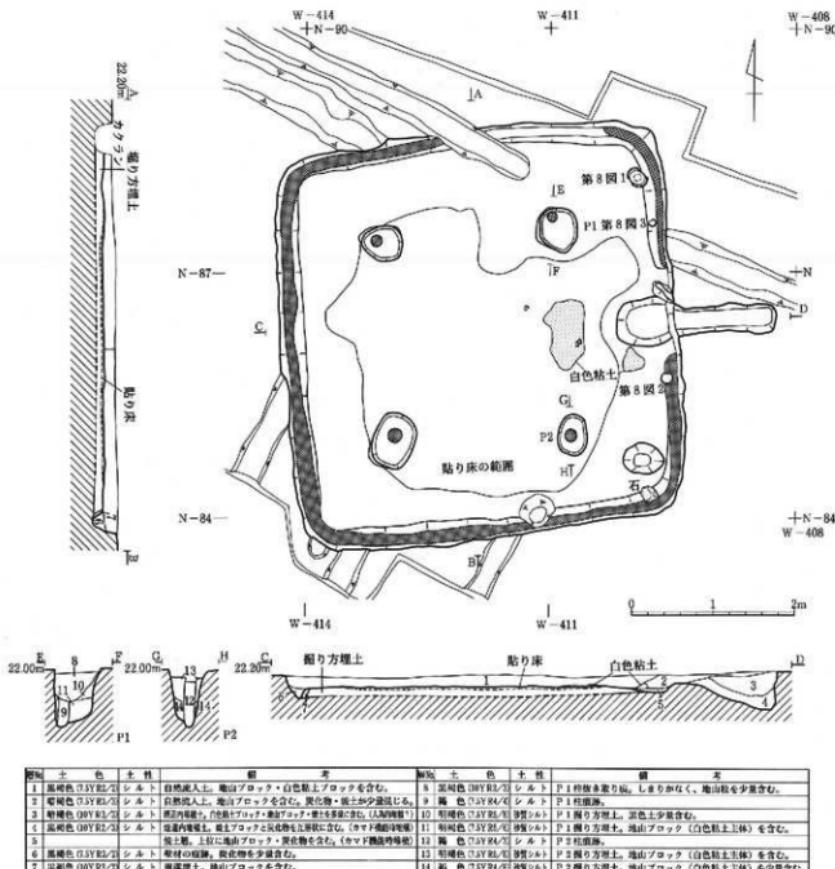
【床】中央部を中心に貼り床され、壁寄りでは掘り方埋土を床としている。床面はほぼ平坦であるが、四隅は外側に傾斜し中央よりも若干低くなっている。

【周溝】壁の直下を全周し、カマド部分で途切れる。上幅20~35cm、深さは10~15cmほどで、断面形は「U」字形を呈する。堆積土は地山ブロックを含み、しまりのある黒褐色土で人為的に埋め戻されているとみられる。また周溝内には壁際に沿って壁材の痕跡とみられる幅15~20cm、深さ約15cmの黒褐色の堆積土が認められる。

【柱穴】床面で4個検出された。柱穴は住居平面形の対角線上に位置し、いずれにも抜き取り痕が認められる。掘り方の平面形は不整な楕円形を呈し、深さは60~70cmである。柱穴の下部では直径約15cmの円形の柱痕跡が認められる。これらの柱穴はその位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

【カマド】東辺中央に付設され、燃焼部・煙道が残存している。燃焼部側壁は左壁が一部残存していただけであったが、状況から白色粘土主体の土を用いて構築されていたとみられる。燃焼部底面は浅く窪んでおり、焼けて赤変している。煙道は先端に向かって傾斜しており、長さ1.3m、深さは東端で50cmである。

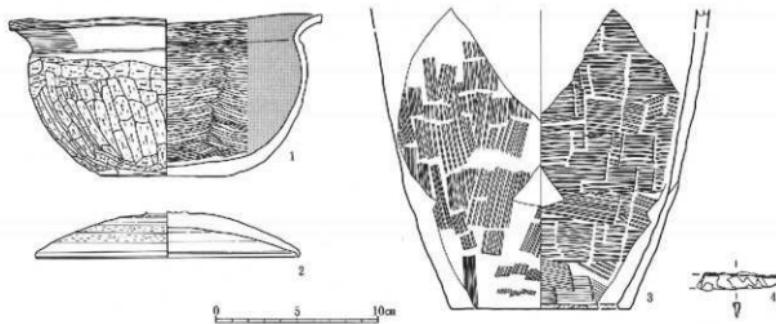
【床面の施設】住居南東隅の床面に約40cm×50cmの不整形を呈した深さ10cmほどの浅い落ち込みが認



第7図 S-1454住居跡

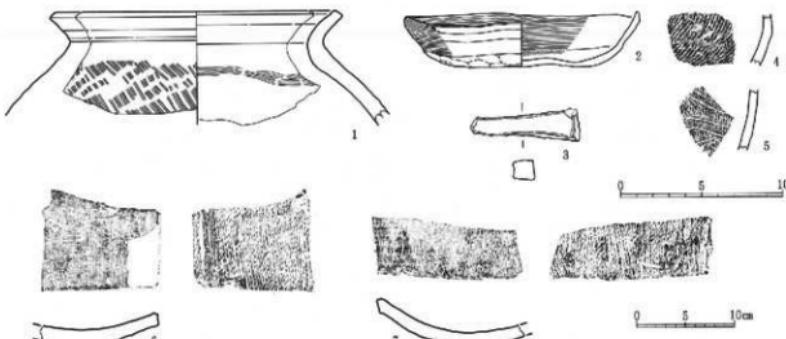
められた。堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐色のシルトで、自然流入土とみられる。位置や大きさから貯蔵穴状ピットの可能性がある。

[出土遺物] 床面から土師器鉢(第8図1)、須恵器蓋(第8図2)、土師器腹(第8図3)、堆積土から土師器片、須恵器片、刀子(第8図4)、が出土している。



| No. | 器種 | 出土場所 | 特徴 | 口径 | 底径 | 高さ | 既存率 | 写真図版 |
|-----|-----|------|---|--------|-----|-----|------|------|
| 1 | 土師器 | 床 面 | 外:(1)ココナデ(2)ナヂ→ラッカズリ下腹ナヂ 内:ヘラシギザ:黒色施墨:内:ヘラスナヂ | 19.2 | 8.3 | 9.3 | 完形 | 8-6 |
| 2 | 須恵器 | 床 面 | 外:クロコナデ→同形ヘルカズリ一つみ接合後クロコナヂ 内:コクロナヂ | 16.2 | — | — | 9/10 | 8-5 |
| 3 | 土師器 | 底 面 | 外:ハケメー→脚ナヂ 内:ハケメー下部ヘルナヂ | (11.6) | — | 1/5 | 8-4 | |
| 4 | 鉄製品 | 刀子 | 半錐形 埋存長5.2cm、最大幅0.9cm、厚さ0.8cm | — | — | — | 8-11 | |

第8図 S1454住居跡出土遺物



| No. | 器種 | 出土場所 | 特徴 | 口径 | 底径 | 高さ | 既存率 | 写真図版 |
|-----|------|---------|--|--------|-----|-----|------|------|
| 1 | 須恵器 | DB: 電源路 | 外:平行印加→クロコナヂ(口縁部) 内:斜文アテ具?→ナヂ→ロクロナヂ | (18.0) | — | — | 1/10 | 8-7 |
| 2 | かわらけ | SD区 上段 | (1)~(3)中(3)ココナヂ(4)~(6)滑面上に上部押え→底ナヂ 内:(1)~(3)ココナヂ(3中~4)→方向のナヂ | 14.6 | 8.4 | 3.2 | 完形 | 8-8 |
| 3 | 鉄製品 | 刀 | 直線面 施行部 縦1.9~19cm、断面形正方形。打ち込み痕明瞭。 | — | — | — | — | 8-12 |
| 4 | 鉄製品 | DB: 電源路 | 文様: L R横文 | — | — | — | — | 8-13 |
| 5 | 鉄製品 | 上段 | 柱(?)上部 打撃による文様 | — | — | — | — | 8-14 |
| 6 | 手糸上器 | DB: 台階 | 凸面+部分的にナヂ 凸面:彫凹き 制縫:ケズリ | — | — | — | — | 8-5 |
| 7 | 手糸上器 | EB 区 | 底上:凹面:布目+部分的にナヂ 凸面:彫凹き 制縫:ケズリ | — | — | — | — | 8-10 |

第9図 その他の出土遺物

【柱列】

【S A455】（第5図）

D区東寄りの緩やかな南西斜面で、ほぼ等間隔でL字状に並ぶ3個の柱穴が検出された。確認面は地山面である。すべての柱穴には柱痕跡が認められ、柱間寸法は東西2.8m、南北2.7mとなっている。掘り方の平面形は一辺が1.0～1.2mの隅丸長方形を呈し、深さは50～60cmである。柱痕跡は直径20cmほどの円形を呈する。埋土はいずれも地山ブロックを含む灰黄褐色土が主体である。四方に柱穴の延びの確認を試みたが、同様の柱穴は周囲に認められず、遺構の性格などは不明である。遺物は出土していない。

IV. 考 察

今回の調査の目的は伊治城西部地区の外郭線の確認であり、外郭線が通ると推測された台地の西端部から大溝跡1条と溝状遺構2条を検出した。これらの構造について、過去の外郭線の調査結果を踏まえ、検討を加える。

◎これまでの外郭線の調査について

第23次調査以前に外郭線の調査は5ヶ所で行われている（第10図）。しかし、第1地点以外は未解明な部分が多く、外郭の構造などについては不明な点が多い。

第1地点は前述したように、多賀城跡調査研究所によって上幅約10m、深さ約3.5mの大溝跡とその北に幅約7.5m、残存高2.5mの土壘が検出された地点である（多賀城跡調査研究所：1978）。この調査により、大溝跡と土壘は外郭施設であり、第1地点が伊治城の北辺になることが明らかとなっている。この南東約200mに位置する第2地点では、水道管理設および道路整備に伴う調査（第16次）が行われ、南北方向に走る上幅3.5～4.0m、深さ60～70cmの溝跡が2条検出されている（築館町教育委員会：1991）。また第1地点から250mほど西側の第3地点でも、道路整備に伴う調査（第12次）によって上幅10m以上、深さ2.5m以上の大溝跡と12mほど北側でこれと平行して走る上幅2.0m、深さ1.3mの溝跡が検出されている（築館町教育委員会：1990）。さらに約200m西の第4地点では、現在は鹿島堰改修によって旧地形が失われてしまっているが、昭和37年に撮影された写真を観察してみると、台地縁辺に沿うように南北方向の十堀状の高まりと大溝の痕跡が認められる。第5地点は伊治城南西部にある第22次調査地点で、台地の南西部と背後の丘陵が接する付近に上幅4.5～5.0m、深さ50～60cmの大溝跡とその内側（東側）にそれと4～5mはなれて平行する深さ20～30cmの溝状遺構2条を検出している（築館町教育委員会：1995）。この調査では土壘は検出されなかったが、2条の溝状遺構は土壘を構築するための土取り痕の可能性もあると考えられている。

以上の調査成績から考えると、区画施設についてはまだ不明な点も多いが、大溝や十堀などによって構成された外郭線が伊治城の立地する台地縁辺をめぐっている可能性が強いといえそうである。

◎SD451、SX452・453について

検出されたSD451大溝跡は台地の西端を地形に沿って南北方向に35m以上伸びている。堆積土はすべて自然流入土で下位に灰白色火山灰が堆積しており、状況から空堀であったとみられる。堆積土内からは造構に伴う遺物が出土しておらず年代的位置付けは困難であるが、灰白色火山灰との関係か



第10図 外郭線調査調査地点と外郭推定線

ら10世紀前半以前である。さらに遺構周辺から出土した遺物は、伊治城の年代観である8世紀後半から9世紀前半の中におさまるものであり、SD451大溝跡もこの年代枠の中で理解できるものと考えられよう。この大溝跡は地形に沿って高いところを取り開むようにめぐっているとみられ、東側の台地には竪穴住居跡、土壤、ピットなどが確認されている。このような状況から考えると、SD451大溝跡はいずれ区画施設になるものとみられる。一方、このSD451大溝跡の東側約20mのところから検出されたSX452・453の溝状造構は、いずれも両辺が曲がりくねることや底面に不整形な窪みが認められるなどの要素を持ち、約10mの間隔で平行するように南北方向に延びている。堆積土はいずれも人為的に埋め戻され、それが窪んで落ち込んだところに黒褐色土や灰白色火山灰のブロックが流れ込んでいる。堆積土や埋土からは8世紀後半から9世紀前半とみられる遺物が出土しており、年代的にはSD451大溝跡と同枠で捉えられる。このような遺構は伊治城の内閣と政庁の区画施設、外郭東辺とみられる第2地点、南西辺とみられる第5地点で確認され、いずれも土取り痕と考えられている。よってSX452・453についても土取り痕と考えられよう。

また、SD451大溝跡が台地を取り囲むようにその端部を走るという位置関係はこれまでの外郭線の調査で検出された大溝跡と共通し、台地西端から東方へ65mほど確認したかぎり、大溝はSD451大溝跡のみであることを踏まえると、外郭西辺の大溝跡である可能性が考えられてくる。そこで他の外郭調査地点の大溝に視点を移すと、第2・3地点では堆積土中に灰白色火山灰が厚く堆積しており、SD451大溝跡と類似している。また、SD451大溝跡に関わる可能性があるSX452・453のような2条の土取り痕が大溝跡の内側をめぐっている状況は、第5地点と同様である。このようなことからSD451大溝跡を外郭施設の一部とみると、第10図のような外郭の推定線を描くことができるであろう。しかし、最も確実である第1地点の大溝跡が上幅10m、深さ3.5mであるのに対し、SD451大溝跡は上幅3.0m、深さ1.3mと規模が小さく、他の地点の大溝跡と比較しても小規模であることや土器が検出されていないなどの疑問点も残り、外郭西辺として確定できなかった。今後、外郭線の位置を確定するためにも大溝跡と土器の確認された北辺を起点とした調査を行い、外郭の構造・規模をさらに解明していく必要があると思われる。

引用・参考文献

- 小井川和夫・小川淳一 (1982) 「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡報告書VI』
宮城県文化財調査報告書第83集
- 小井川和夫・手塚 均 (1978) 「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報』
宮城県文化財調査報告所第53集
- 進藤秋輝 (1991) 「城柵の設置とその意義」『北からの視点』 宮城県考古学協会仙台大会資料
- 宮城県多賀城跡調査研究所 「伊治城跡I」～「伊治城跡III」 *付表1参照
- 築館町教育委員会 「伊治城跡」 築館町文化財調査報告書第1集～第9集 *付表1参照

付表1 『伊治城跡』調査および報告書一覧

◎多賀城跡調査研究所による調査

| 年次 | 調査内容 | 発掘面積 | 発掘期間 | 備考 | 文献 |
|------------------|-----------------------------|--|------------------------|----------------------------------|-----|
| 昭和51年度 (1976) | 地形図作成(航空測量) 現地踏査・研究実験 | | | | |
| 昭和52年度 (1977) | ①北外郭線発掘調査 中央平坦部地区発掘調査 | 168m ² 270m ² | 7/4~8/3 | 大溝1、土塁1、土壘状遺構1 窓穴住居1、墨書き器「城解」 | (1) |
| 昭和53年度 (1978) | ②中央平坦部地区発掘調査 西辺外郭線地区電気探査 | 780m ² | 7/3~8/4 11/11~11/13 | 窓穴住居4、掘立柱建物1、井戸6、溝5、 土壤4 | (2) |
| 昭和54年度 (1979) | ③中央平坦部地区発掘調査 | 1,000m ² | 10/29~12/4 | 窓穴住居17、掘立柱建物2、井戸、溝、土壤 | (3) |

◎築館町教育委員会・宮城県文化財保護課による調査

| | | | | | |
|------------------|---------------|---------------------|-------------|---|------|
| 昭和62年度 (1987) | 1. 駿道整備 | 220m ² | 7/1~8/12 | 窓穴住居5(うち焼失住居1)、溝4、井戸1 | (4) |
| | 2. 農協支所移転 | 150m ² | 7/4~7/18 | 窓穴住居5、土壤1 | |
| | 3. 個人住宅便換取付 | 2m ² | 8/5 | | |
| | 4. 水道管理設 | 1,250m ² | 9/1~9/14 | 窓穴住居8 | |
| | 5. 農道整備 | 1,080m ² | 1/18~2/9 | 窓穴住居7、土壤2、溝 | |
| | 6. 備合建築 | 90m ² | 2/25 | | |
| 昭和63年度 (1988) | 7. 国庫補助事業 | 1,500m ² | 7/1~10/30 | 内郭区溝2、窓穴住居2、土壤、円形溝1 | (5) |
| | 8. 水道管埋設 | 142m ² | 11/4~11/24 | 東辺外郭大溝1?、窓穴住居3、溝 | |
| | 9. 農道整備 | 504m ² | 2/6~2/12 | | |
| 平成元年度 (1989) | 10. 宅地現状変更 | 480m ² | 4/11~6/1 | 窓穴住居8、掘立柱建物1、土器埋設上塗1 | (6) |
| | 11. 国庫補助事業 | 1,200m ² | 7/21~11/22 | 内郭区溝1、掘立柱建物3、窓穴住居9 | |
| | 12. 通字路整備 | 1,700m ² | 9/5~9/16 | 北辺外郭大溝2、古墳時代前期溝1 | |
| | 13. 農道整備 | 1,960m ² | 10/16~11/10 | 内郭区溝2、〔政庁域〕掘立柱建物・溝 | |
| | 14. 水道管理設 | 170m ² | 11/29~12/8 | 窓穴住居3 | |
| 平成2年度 (1990) | 15. 国庫補助事業 | 900m ² | 9/3~9/29 | 掘立柱建物3、窓穴住居8、円形溝1、井戸2 | (7) |
| | 16. 道路整備(人掘線) | 1,320m ² | 9/27~10/5 | 東辺外郭大溝2?、窓穴住居16、溝、井戸、土壤 | |
| 平成3年度 (1991) | 17. 国庫補助事業 | 1,300m ² | 5/27~7/16 | 〔政庁域〕正殿・後殿・脇殿・築地 | (8) |
| | 18. 個人住宅 | 300m ² | 11/19~12/2 | 古墳時代柱跡 | |
| 平成4年度 (1992) | 19. 国庫補助事業 | 1,300m ² | 5/11~7/4 | 〔政庁域〕正殿・後殿・脇殿・南門・築地 〔内郭南側〕掘立柱建物、窓穴住居、溝、土壤 | (9) |
| | 20. 国庫補助事業 | 1,500m ² | 10/4~11/18 | 〔内郭南東側〕築地・掘立柱建物、窓穴住居 〔内郭南側〕掘立柱建物、窓穴住居、土器埋設 | |
| 平成5年度 (1993) | 21. 国庫補助事業 | 820m ² | 10/3~11/27 | 〔内郭北側〕掘立柱建物、窓穴住居、溝 〔内郭南側〕掘立柱建物、窓穴住居、占墳 | (10) |
| | 22. 国庫補助事業 | 1,140m ² | 10/5~11/14 | 〔内郭北側〕掘立柱建物、土壤 〔外郭南側〕南西辺大溝1、溝状遺構2 | |

- (1)宮城県多賀城跡調査研究所 1978 「伊治城跡I~昭和52年度発掘調査報告書」 「多賀城跡昭和52年度発掘調査報告書第3冊」
 (2) " 1979 「伊治城跡II~昭和53年度発掘調査報告書」 「多賀城跡昭和53年度発掘調査報告書第4冊」
 (3) " 1980 「伊治城跡III~昭和54年度発掘調査報告書」 「多賀城跡昭和54年度発掘調査報告書第5冊」
 (4)築館町教育委員会 1988 「伊治城跡~昭和62年度発掘調査概報」 「築館町文化財調査報告書第1集」
 (5) " 1989 「伊治城跡~昭和63年度発掘調査概報」 「築館町文化財調査報告書第2集」
 (6) " 1990 「伊治城跡~平成元年度発掘調査概報」 「築館町文化財調査報告書第3集」
 (7) " 1991 「伊治城跡」 「築館町文化財調査報告書第4集」
 (8) " 1992 「伊治城跡~平成3年度発掘調査報告書」 「築館町文化財調査報告書第5集」
 (9) " 1993 「伊治城跡~平成4年度発掘調査報告書」 「築館町文化財調査報告書第6集」
 (10) " 1994 「伊治城跡~平成5年度発掘調査報告書」 「築館町文化財調査報告書第7集」
 (11) " 1995 「伊治城跡~平成6年度発掘調査報告書」 「築館町文化財調査報告書第8集」
 (12) " 1996 「伊治城跡~平成7年度: 第222次発掘調査報告書」 「築館町文化財調査報告書第9集」

付表2 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

| 西暦 | 和暦 | 記事 | 文献 |
|-----|-------|--|----------------------|
| 767 | 神護景雲1 | 10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守将軍田中多太麻呂らに叙位、外從五位下道嶋三山は從五位上を賜う。 | 統日本紀 |
| 768 | 2 | 12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免する。 | 統日本紀 |
| 769 | 3 | 1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免する。 2. 桃生・伊治に板東8国の百姓を募り安置しようとする。 6. 栗原郡をおく。これはもと伊治城である。 (「統日本紀では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみられ、ここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとする） 6. 浮宿の百姓2,500人を伊治城に遷す。 | 統日本紀 統日本紀 統日本紀 |
| 780 | 宝亀11 | 3. 上治郡人領伊治公皆麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大橋、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで、多賀城にせまり府庫の物をとり放火する。 | 統日本紀 |
| 792 | 延暦11 | 1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の傍に妨げられて果たせないでいることを訴える。 | 類聚園史卷190 |
| 796 | 15 | 11. 伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。 11. 相撲・武藏・上総・常陸・上野・下野・出刃・越後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。 | 日本後紀 日本後紀 |
| 804 | 23 | 11. 栗原郡に3駅を置く。 | 日本後紀 |
| 837 | 承和4 | 4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動搖し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また、栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。 | 統日本後紀 |

| 西暦 | 和 景 | 記 事 | 文 献 |
|------|------------------|--|---------|
| 905 | 延 喜 5 (着 手) | <p>延喜式</p> <p>○神名式 陸奥国100座</p> <p>栗原郡7座 大1座 表刀神社</p> <p>小6座 志波姫神社</p> <p>雄銳神社</p> <p>駒形根神社 和我神社</p> <p>香取御兒神社 遠流志別石神社</p> <p>○民部式 東山道・陸奥国大國</p> <p>……志太、栗原、磐井……</p> <p>○兵部式 陸奥国駿馬</p> <p>……玉造、栗原、磐井……各5社</p> | 延 喜 式 |
| 931 | 承 年 間 | 和名類聚抄 陸奥国 | 和名類聚抄 |
| | | 栗原郡(久利波良) | |
| 938 | | (郷名) 栗原・清水・仲村・会津 | |
| 1062 | 康 平 5 | 8. 前9年の役で源頼義軍は、栗原軍當面に到り、清原武則軍と合う。軍を編成し磐井軍中山に赴く。 | 陸 奥 話 記 |
| 1189 | 文 治 5 | <p>8. 7 文治の役で源頼朝の奥州攻めに対し、藤原泰衡自身は、国分原鞍橋(仙台市)に陣し、その後方栗原・三迫・黒岩口・野辺には、若九郎大夫らを大將軍となし数千の勇士を差しむけた。</p> <p>8. 21 頼朝軍は暴風雨をついて途中栗原・三迫などの要害による平京方の抵抗を排しつつ松山道より津久毛橋に到る。</p> | 吾 妻 鏡 |
| 1190 | 建 久 1 | <p>2. 12 頼朝の征東に最後まで抵抗する大河次郎兼任と頼朝方の軍士、在国御家人らとが栗原の一迫で戦う。</p> <p>3. 10 栗原寺に逃げのびた兼任が樵夫らに殺害される。</p> | 吾 妻 鏡 |

報告書抄録

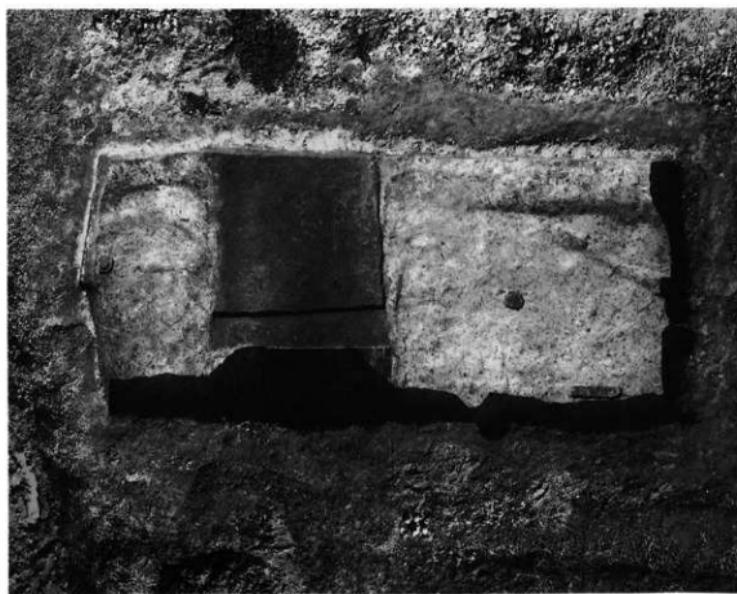
| | | | | | | | |
|--------|--|--|--|--|--|--|--|
| ふりがな | いじょうあと | | | | | | |
| 書名 | 伊治城跡 | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 築館町文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第10集 | | | | | | |
| 編著者名 | 藤村博之 | | | | | | |
| 編集機関 | 宮城県教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒980 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3682 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1997年3月31日 | | | | | | |

| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 ° ′ ″ | 東経 ° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|----------------|-----------------------|-------------|-------|----------------------------|----------------------------|-------------------------------------|---|------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| いじょうあと 伊治城跡 | 宮城県 栗原郡築館町 字城生野 | 045217 | 41007 | 38度 45分 50秒 | 141度 02分 40秒 | 19961007 ~ 19961107 | 450 | 外郭確認 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 伊治城跡 | 城柵跡 | 奈良~ 平安時代 | | 大溝跡 溝状遺構 竪穴住居跡 柱穴 | 1条 2条 3軒 3個 ほか | 土師器 須恵器 瓦・鉄製品 かわらけ 弥生土器 | 人溝跡は区画施設と みられ、位置や方向 から外郭西部の区画 施設になる可能性が ある。 | |

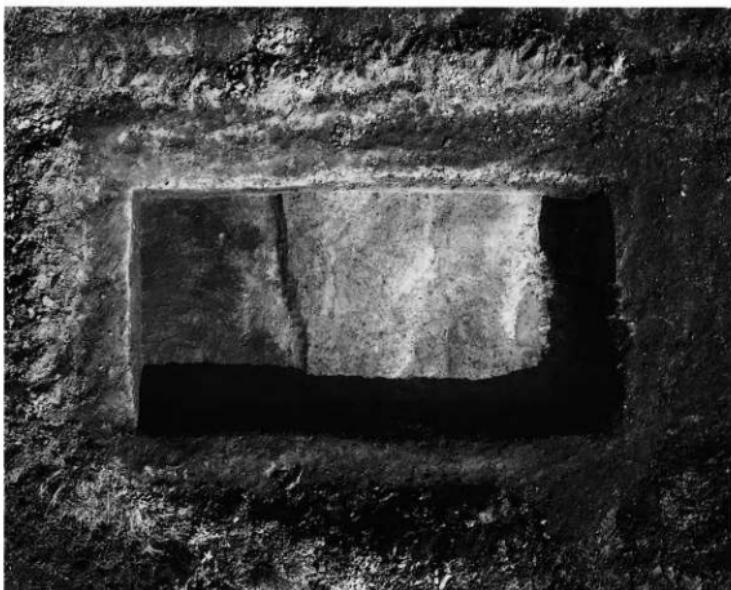
写 真 図 版



図版1 上：外郭西辺の地形 下：調査区全景



図版2 上：A区 下：B区



図版3 上:C区 下:SD451大溝跡断面



図版4 上:D区 下:S X453断面



図版5 上:E区 下: SX452断面



図版6 上：F区 下：S1454住居跡



図版7 上：S1454カマド 下：SA455断面



図版8 出土遺物

築館町文化財調査報告書 第10集

伊 治 城 跡

印 刷 平成9年3月25日

発 行 平成9年3月31日

発行 築館町教育委員会
宮城県栗原郡築館町栗師 丁目7-1

印刷機 小野寺印刷所
宮城県栗原郡築館町伊豆 丁目7-3

